

跡見学園女子大学学芸員課程

平成28年度博物館実習について

跡見学園女子大学 学芸員課程 主任教授

村田 宏

平成28年の博物館実習の概要はつぎの通りである。

本学の博物館実習は三種類からなっている。

- ①学期における、通常授業時の基礎実習、一日の行程で実施する見学実習
- ②夏期休暇（8月～9月）期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習
- ③秋学期における学外実習事後指導、および花菱記念資料館を使用した事後実習

- ①春学期の基礎実習は、美術資料、民俗資料の取り扱い、写真撮影の基本を中心に行われた（専任教員 1名、兼任講師 2名）。必要な基礎的修練は十分に尽くされたものと考えている。

②夏季の学外実習

夏季の学外実習は、以下の19館で行われた(順不同)。各館にはいつもながら懇切丁寧なご指導とご便宜を賜わった。あらためて御礼申し上げたい。

東京都江戸東京博物館 練馬区立美術館 高崎市タワー美術館 板橋区立郷土資料館 埼玉県立歴史と民俗の博物館
千葉県立中央博物館 日本近代文学館 ふじみ野市立大井郷土資料館 古河歴史博物館 深川江戸資料館 大田区立郷土博物館 東玉人形の博物館 渋谷区立松濤美術館 群馬県立近代美術館 上野の森美術館 館林市第一資料館 東京富士美術館 相模原市立博物館 葛飾区立郷土と天文の博物館





紙幅の制約のため、実習レポートを二編だけ掲載しておこう。

I.S.生

今夏、大田区郷土博物館にて学芸員実習をさせて頂いた中で主に学んだことは、区の博物館だからこそいかに地域密着で地域の歴史を区民に伝えるかという取り組みについてである。勿論地域に関する資料を展示しているのだが、それ以外にこのことが感じられる実習項目が主に二つあった。

一つは地域の小学生と、地域の教職員を同時に対象として行うむぎこかし作りの体験学習である。大田区大森はかつて麦が特産物として麦わら細工などといった麦の生産が盛んであったようである。今は廃れてしまったその文化を伝えるとともに、教科書に出てくる千歯抜きや唐箕などを実際に用いて学習していくというものである。学芸員による小学生向けの説明、教職員に向けての説明とそれぞれ言葉づかいや、話の切り口を身近な事柄から広げていくその技に圧倒された。また姉妹都市アメリカからの学生を招いて麦わら細工を体験してもらうという活動も行っており、地域だけに止まらず海外にも発信しているという取り組みも知ることが出来た。

二つめは新たな展示施設を作る際の学芸員による管理の必要性である。実習中に大田区の展示館、資料館に五つお邪魔した。その中でも特に印象に残っているものは、再来年を目指して着々と準備が進められている勝海舟記念館の工事についてである。晩年を洗足池で過ごした勝海舟についての記念館を、その地にある旧清明文庫（鳳凰館）を改装しているその現状を実際に中に入って見学させてもらった。ゼロからではなく、現在ある文化財建造物を活用して新しい博物館を作るということは、



様々な制約や解決しなければならない問題も多くあり、非常に大変なことであるのだと感じた。例えば明治時代に作られた窓をそのままに残しておきたいが展示するには日光を取り込むことは良くないため取り換えねばならない、資料を収蔵するには環境が良くないので別の場所で保管しなければならない、来館者のことを考えて休憩スペースやお手洗いを設置するには増築しなければならないということなどである。増築するには壁を壊すことになり、そうすると歴史的な物をその手で壊さねばならないということにもなり兼ねないのだということを知り、実際に勝海舟記念館を担当している学芸員の方は（大田区内の記念館等の管理もほとんど大田区郷土博物館の学芸員が行っている）そのような状況になった時に葛藤があると話していた。

資料のこと、来館者のこと、双方を考え一番いい行い方で展示を進めていく学芸員は非常に難しい仕事だと感じたが、さらに双方への熱意と限られた制約の中でいかに良いものを作り上げられていくのかということが、学芸員として働く際にはもっとも必要になってくるものなのではないかと感じた。それは実習最終日に行った新プラン作成発表にて痛感した点

でもあった。私の新プランはとにかく「伝える」「楽しむ」ことを第一に様々な仕掛けを来館者の立場から考えて作るというスタイルであったが、現実的な視点から見ると著作権やコストなどといった制約が表れてくる。その制約とどう付き合い、その中でどう資料を活用して来館者に伝え、楽しんでもらえるか、それが学芸員の課題なのだったと思った。

M.K.生

埼玉県立歴史と民俗の博物館での実習では、一週間という短い時間の中ではあったが、学芸員の基本的小仕事も満遍なく教えていただいた。講義だけでなく、自分たちが実際に仕事を体験できたことが授業では得られない貴重な時間となった。目で見て、手で触れ、自分で考えたことを発表し、それに対してフィードバックをいただき、自分の頭の中の学芸員の知識が一つ一つ蓄積され、具体性を帯びるようになった。

最初は、収蔵品の掃除や館内に虫を入れないための工夫により、客としては絶対に知ることの出来ない博物館の徹底した管理の仕方に、改めて展示物の大切さに気づかされた。一方で事務的な作業、チラシの部数作りやラベル貼り等も学芸員の仕事だと知って、全ての作業を自分たちで行うということに、周りと遮断して、単独で運営しているイメージを持った。

次に、民俗・古美術・歴史の展示物の扱い方、検品調査の作成を行った。扱い方に関しては、学芸員の基本的な作業であり、出来て当たり前だと思われてしまうので、十分な技術が必要だということを学んだ。検品調査では、実際は短い時間で自分以外の人にもわかるような内容にしなければならない。私は、細かいところに目がいきすぎて、全体として注意すべきことが抜けてしまっていた。わずかな時間でも大きな視野をもって、他の人に伝えることを心がけるべきだと反省した。

私は最後の二日間がとても有意義な時間であったと思う。それは、展示方法と実際の館内展示に対して問題点をあげ改善策を考えるというものだった。前者では、自分たちで展示方法を考え、キャプションを作り、プレゼンを行った。お客さんの視点から考えて展示することや、作業中での注意点等たくさんのアドバイスもいただき、自分たちなりに気をつけていたことが足りなかったり、裏目にでたり、色んなことを把握しておかないと展示が自己中心的になってしまうなと感じた。後者は学芸員の仕事を一通り体験した後に、改めて客となって館内を観察することで、気づけなかった問題点が発見された。しかし、予算の関係で簡単に変えられないこともあり、客からの声との板ばさみに頭を悩ます問題だということを知った。このことにより、展示する際に新しい視点を持つことが出来たと思う。また、私が印象に残ったものは、展示室は展示、体験は体験と、なんでもかんでも親しみをもってもらうために行動するのではなく、学芸員の視点からみてメリハリをつけるべきだということ学んだ。

最後に学芸員として働く際にもっとも必要なことは、自分たちを特別だと思わないということだと感じた。実習の中で話を聞いたことだが、人一倍に勉強し学芸員になると、自分をすごいと感じてしまうと話していた。また、私も周りの人と交流する機会がないため、館内で留まってしまう印象を受けた。しかし、絶対学芸員だけで成り立っているわけではなく、間接的でもたくさんの人で成り立っているし、学芸員がその姿勢では、お客さんに展示物を上手に伝えられない。また体験教室等を通じて子供から発想をもらったりすることがあるとも書かれていた。この実習というのも、次の世代に学芸員や博物館の未来を担って欲しいという思いで受け入れている。自分中心の考え方ではなく、他人の目線になって考えて仕事を行うことで、居心地のよい博物館になるだろうと感じた。



③秋学期は、夏季の学外実習での諸経験をふまえ、花咲記念資料館を使った模擬展示の企画立案に精力を傾注する。

民俗・歴史班、美術班に分かれた履修者は、展示の実施計画を精錬させていくが、毎年のことながら卒業論文提出の時期(12月中旬)と重なり、十全な準備をなしがたいこともある。しかし、そのような困難を乗り越え、オープンに漕ぎつけた時の達成感はひとしおである。



博物館実習生模擬展示

会 期 平成29年1月25日（水）～2月6日（月）
 会 場 跡見学園女子大学花嫁記念資料館
 開催時間 9：30～16：30
 日曜・祝日は休館
 入館者数 352名

「お江戸と平成の結婚展覧会」 展示室1

担当学生名	五十嵐夏子	大野 詩織	岡部 真由	木藤 莉奈
	黒沢 由香	小西理恵子	小林 由香	迫田 若菜
	白濱 璃奈	杉田 愛	杉山 夏姫	田邊 祥子
	松岡 朋美	吉田華奈子	渡邊めぐみ	渡部 桃香

展示趣旨

江戸時代の結婚は、家同士のつながりを重視するもので民俗的要素が非常に強いものでした。明治から現代にかけて神前式やチャペルなどの宗教者が介在する結婚の形が広まり、多様な結婚のスタイルを選択するようになりました。例を挙げると、伴侶の自由や時世に左右されないという点です。江戸時代は武家諸法度で異なる身分同士の結婚は禁じられていました。また享保の改革の儉約令に代表されるように、結婚に使われるものが制限されるなど、結婚＝贅沢の象徴とされていました。現在の結婚は、憲法によって婚姻の自由が認められています。また、このような政治による儉約令や縛りに左右されていません。

現在の結婚は、家同士のつながりから個人のつながりに変化するに伴い、個人の選択肢また価値観が多様化しています。江戸時代と現在の結婚を通して、結婚の意味と現在の多様性による選択の自由を知ってほしいと考えています。

跡見学園女子大学花嫁記念資料館
 企画・学芸員課程4年生による

博物館実習生模擬展示

●歴史民俗班「お江戸と平成の結婚展」
 ●美術班「心を包むものも、東西美術からみる生き物のかたち」

2017年1月25日[水]～2月6日[月]

開館時間 午前9時30分～午後4時30分 入館無料

休 館 日 日曜・祝日

会 場 跡見学園女子大学花嫁記念資料館 展示室1・2（2号館1階）

○問い合わせ：花嫁記念資料館 増五郎新座市中野1-9-6 TEL: 048-478-0130



Ⅱ「心を包むもふもふ園～東西美術からみる生き物のかたち～」 展示室2

担当学生名 岩下真理恵 関口実裕紀 田中 絢菜 野田 夏生 福井 恵 丸山紗由姫

展示趣旨

1月も終盤にさしかかり、あっという間に2月に突入しますが、まだまだ厳しい寒さが続きますね。そこで私たちは見る人の心を温かくしたい!という想いから優しく包み込んでくれそうな「もふもふ」という言葉をテーマに展示を考え、ふわっとした愛らしい動物たちを集めて「もふもふ園」と名付けました。

この展示では動物たちを見て、ただ可愛いと癒されるだけではなく、是非解説と共に鑑賞をしていただきたいと思っています。西洋と日本における在り方の違い、また絵の中ではどういった意味や役割をもって描かれているのかといった、様々な動物たちの「かたち」を発見できるからです。いつもは深く考えずに見たり接している彼らに、こんな一面もあったのか!と見つめ直すきっかけになりましたら幸いです。

今回の展示では、実際その毛並みに触れることはできません。しかし、視覚を通して伝わってくるもふもふ感は、きっとあなたの心をぽかぽかと包み込んでくれることでしょう。どうぞ私たちの展示を心ゆくまでお楽しみください。

